



名古屋大須ロータリークラブ

WEEKLY REPORT

NO 944

＜本年度クラブ会長方針＞

LEAD THE WAY - 率先しよう



承認 1985年2月12日 例会日 木曜日12:30 例会場 名古屋東急ホテル
 会長 神田 憲 URL <http://www.nagoya-osu.org> Email office@nagoya-osu.org
 幹事 内藤 明 電話 (052)251-0181 FAX (052)251-0337
 事務局 460-0008 名古屋市中区栄4丁目6番5号 丸越ビル 6F

2006～2007年度
 R. I. 会長
 ウィリアム B. ボイド

世界理解月間

第103回例会

平成19年2月22日(木)

於名古屋東急ホテル

出席計算数 62名中 43名出席
 出席率 69・35%
 前々回出席率 95・45%

オオスシガーズによる合唱

「いざ起て戦人よ」

指揮者 鬼頭 茂成

ゲスト

元青少年交換学生(ROTEX)

國本 築永さん

森 葵さん



森 葵さんと國本築永さん

ピシター

あま R.C 酒井 和雄さん

ニコボックス

森さん、國本さん、大学合格おめでとう、今後はROTEXとして後輩を指導してください。

神田 憲

常磐小学校での国際交流会、無事終わりました。グレースとソニアが出席しました。

国際奉仕委員会、新世代委員会

伊藤与則委員長、お疲れ様でした。

鬼頭 茂成

國本さん、森さん、楽しい話をお願いします。

高木 政義

吉田 憲一さん、おめでとう。

吉田 隆彦

会長挨拶

会長 神田 憲

青少年交換活動の記録に残っている最初の交換は、フランスのニース R.C がヨーロッパ諸国の学生と交換を始めた1927年にまで遡ります。1929年にはデンマークの「ペンヘーゲン R.C」が始め、1939年には米国カリフォルニア州のクラブとラテン・アメリカ諸国の間の交換が開始され、1958年には米国東部にまで交換活動が広がりました。1972年、国際ロータリーの理事会が、世界的な平和と理解を推進する価値ある国際的活動として、世界中のクラブに青少年交換を推奨することに同意しました。このプログラ

ムがスタートして今年は丁度80年で、近年では毎年約7000名の交換が行われています。

日本の派遣学生第一号は1962年九州の久留米 R.C (当時 D. 370) がオーストラリアの Rosemead R.C (当時 D. 282) へ宮崎洋子さんを派遣、翌年の1963年交換として Kenneth & Angel 君が熊本 R.C で受入されました。宮崎さん(今は関本さん)は私と同じ歳です。

260地区(現2760)は1968年からスタートし、当初はアメリカ・カナダ・オーストラリアの英語圏三ヶ国だけの交換でした。

留学から帰国した学生の皆さんが派遣先の国で色々な国からきた留学生と知り合えて大変楽しかったけど、何故か2760地区は英語圏以外の国とは交換をしな

いのかと質問や要望を受けました。1993年のメルボルン大会のプレコンベンション(事前会議)で私は初めて世界青少年交換会議に出席し、そこでロビー外交をしました。それが交換先を増やすことには出来ませんでした。

その理由が何故かわからずアメリカの友人に尋ねたところ、コンタクトする相手を選びなさい。即ち地区の委員長とか日本担当とかが必ずいるからとアドバイスを受けました。それを実行したところ、19

97年にブラジル・フィンランド、99年にはフランス・台湾、その後タイ・ドイツ・ノルウェー・ベネズエラ・韓国・スイスと13ヶ国と交換の輪を広げることができました。

英語圏以外で全く言葉が理解できなくて一年間乗り切った行けるかなと言った事を地区青少年交換委員会には心配していましたが、派遣学生は見事に言葉の壁を乗り越えてくれました。若いことは素晴らしいですね。

今日のROTEXの卓話を楽しみにしています。



留学生を招いて

帰国報告会

「ドイツ留学」

名古屋和合 R.C (スポンサー R.C)

愛知淑徳高校

國本 築永さん

こんにちは、2005～2006年度、ドイツ派遣帰国生の國本築永です。帰国して半年以上たち、留学の記憶も帰国直後に比べ鮮明ではなくなってきましたが、交換留学での経験の話をさせていただきます。

きたいと思います。

派遣前に自分なりにいろいろと調べ、派遣先をドイツに決めて行きました。ドイツでの生活はいろいろと予想外なことばかりでした。

ドイツ人は日本人と似ていると聞いていたので、少し期待していましたが、理解出来ないことや理解されないこともたくさんあり、特に日常生活の中でも曖昧さが嫌いな人たちのために、意外と適当なところも多くその点ではとても苦労しました。

現地では一般の家庭で生活しました。ホストファミリーは病院、銀行、学校のことなど全然助けてくれないし、迎えにくると言ったのに忘れられていたり、初めの頃はドイツ語もほとんど話せなかった。それでも一人でやらなければならぬことが多く大変でした。ドイツ人はこんなひどい人達ばかりなのかと思悩んでいた。私もしましたが、異国の地で困っても大抵のことはなんとかなるということを知りました。食事では出されたものも、はつきりといしくない、まずいなんて言えないので、その味になれるまで少し大変でしたが、この味もドイツ文化だと思ひ、途中からだいたい慣れたと思います。ドイツでも家庭によつて食事状況がかなり違うので、

一概にはつきりドイツ料理はまずいとは言いきりですが、私のステイ先は、あまりおいしくなかったです。途中少し問題があり、当初の家族のころを、第二ホストファミリーの家に移ることにになりました。第三ホストファミリーを名乗り出てくれた家族は、本当にいい人たちで私を家族の一員として扱ってくれて、派遣の最後ですてきなホストファミリーのもので過ごせて本当に楽しかったです。

ドイツ滞在中に地区の留学生と行ったドイツ旅行、ヨーロッパ旅行は本当に楽しかったです。この旅行が一年間だったと皆が口々に言うくらい本当にすばらしい旅行でした。ドイツでの旅行では留学生がすごく多かった。でもA班B班と二つに分かれていました。派遣先地区で交換留学をしているクラブの数はかなり多かったと思います。小さい頃から家族会などに参加させていた。いるので、ロータリークラブというのは、各クラブにたくさんの方々がいて、一つ一つのクラブは大きいのが当たり前だと思っていました。が、ドイツに行くとき小さい田舎町にも小さいクラブがあり、小さなクラブでも交換留学生をいました。ひとクラブから派遣生が2、3人というのが平均的で、その地

区では留学生が90人以上もいました。90人がいろいろな国から来ていて、世界のいろいろな国に友達ができました。これは私がこの留学を通して得た大きなもののひとつです。昔と比べ海外は身近になつて来ていると言われていますが、私の高校でも一年という期間を留学する生徒は、ひと学年約400人という中で毎年10人いるかないかです。高校生での留学となると大学受験ということが大きく理由としてあげられますが、行きたくても行く機会がない、一般の留学機関から一年間行くという費用がかなりかかるという理由で留学をあきらめている子も多いのではないかと思います。このプログラムをより多くの人たちが知り、留学をあきらめようとして

いる高校生にチャンスがまわればいいなと思います。最後に、派遣中思ったことですが、日本で留学生を受け入れてくださっているロータリーの家族の方々は回りのホストファミリーと比べて、本当に親切すぎると思います。もし私が外国人だったら絶対に日本の家族に、日本のロータリークラブにホストしていただきたかったです。

本当に私自身大変だったこともあり、地区に迷惑をお掛けしたこともたくさんありましたが、今と

なつては辛かったことも含め、経験として全体的にいい思い出です。ありがとうございました。



「留学を経て」

稲沢RC(スポンサーRC)

愛知啓成高校

森 葵さん

時が過ぎるのは早いもので、帰国してから一年が経とうとしています。留学以前の私は人見知り、加えて何事にも消極的でした。与えられた事だけをこなすという毎日を送っていました。留学をして私は自分に自信を持てるようになり、激しかった人見知りもほぼなくなり、物事に積極的に取り組むことができるようになりました。

留学中に一番苦労したことは言葉でした。ブラジルは英語ではなく、ポルトガル語を公用語として使っています。留学前に塾へ行き、少しは勉強していったものの、実際に現地で聞いた生のポルトガル語は理解できませんでした。そんな私に言葉を教えてくれたのは、ブラジルで出来た友達でした。初

め

めのうちは英語、ジェスチャー、そして絵を使って根気よく教えてくれました。そのおかげで聞き取りは4ヶ月くらいで出来るようになりました。聞き取りが出来るとなつてからは、会話を全てポルトガル語だけを使い、少しでも早く私が言葉を覚えられるよう努めてくれました。友達の他にもホストファミリーやロータリアンさんも快く協力してくれました。このような人々のおかげで一年がたつころには、日常会話程度なら難なく話せるようになりました。

ロータリーの旅行には他の国の留学生達と共に参加しました。私がいた地区はブラジルで一番大きい地区だということもあり、百名近い留学生がいました。旅行中には互いの国の文化や習慣について質問し合ったり、互いの国の言葉を教え合ったりしました。全ての会話はポルトガル語で話しました。世界の共通語が英語と知られている中で、様々な国の留学生が英語ではないポルトガル語でコミュニケーションをとる光景は新鮮であると同時に興味深いものでした。

このような機会を与えて下さった全ての皆様に心より感謝を申し上げます。

本当にありがとうございました。

四つのテスト

①誕生の経緯と効能

1982年、ハーバード・テラーは破産状態にあったクラブ・アルミニウム社の再建を引き受けました。倒産すれば250人の従業員は職を失います。普通なら狼狽するところをハーブは、論理的に改善策を練り始めました。どのよう

にしたらかをその時彼自身の言葉で話してもらいましょう。「この状況を切り抜けるために、我々は道徳的であるとともに強い論理感を持たねばならない。私は正義の中にこそ力が宿るのだと考えた。もし従業員達にこのことを信じさせることができればなら、きつとまういだろう。私は社内の誰もが直ぐ覚えられよう簡単な論理的尺度が必要だと考えた。そうしたある朝私は、机に頬杖を突いていた。しばしあとに私は上手を伸ばし頭に浮かんだことを書き留めた…24の語句で」



「この基本的な心理学が魔法の秘密でした。だれも命令を出してはならない。しかしこれを読んだ人はどうしたら立派な人間として行動できるか示されています。24語の内5つのキーワード、**真実(Truth)**、**公平(Fair)**、**善意(Goodwill)**、**よりよい友情(Better Friendship)**、**有益(Beneficial)**は誰でも記憶出来るでしょう。

年月が経つにつれ彼の24の語句が世界中で支持され、魔法のような効き目があるのを目にして驚きは増すばかりでした。それは戒律でも訓戒でもありません。どちらかといえば読み手が自分の答えを見つける余地がある、易い

けれど厳しい質問です。この基本的な心理学が魔法の秘密でした。だれも命令を出してはならない。しかしこれを読んだ人はどうしたら立派な人間として行動できるか示されています。24語の内5つのキーワード、**真実(Truth)**、**公平(Fair)**、**善意(Goodwill)**、**よりよい友情(Better Friendship)**、**有益(Beneficial)**は誰でも記憶出来るでしょう。

一緒に最上級という表現を削除し始めました。そしてその後「よい良い」とか「一番」とか「最高」とか言う言葉を使うのを止めになりました。製品に関して真実だけを述べていました。二ヶ月を過ぎ破産状態の会社はもう一度利益をあげているように見えました。ハーブは4人の部長を部屋に呼び入れました。一人はローマンカソリック、一人はユダヤ正教、もう一人はクリスチャン・サイエンス、4人目は長老教会派でした。ハーブは彼らに24語の言葉を見せました。『四つのテストは何が自分が信じている宗教の教義や理念に反するものがあるか』と一人一人尋ねました。皆は『いいえ』と云い、四つのテストに賛同して全従業員に覚えてもらい、各自の対人関係に用いてもらうことにしました。『必要なとき誰でも使える簡単なテストだよ』と説明されました。フアンファーレもメロドラマもありませんでした。従業員たちは印刷された言葉を手にして暗記しました。易しさが効果的で彼らの興味を引き、その言葉は働く者の倫理的尺度となりました。会社はある印刷業者に、驚く程安い価格で大きな注文を出したところでした。注文の品が配達されたあとでその印刷業者は500ドルの見積のミスに気が付きました。損害を覚悟の

上、業者は会社に損失の一部を補填してもらえまいかと打診しました。法律的には会社はそのミスを無視して利益を得ることができたでありましょう。会社はまだ多くの負債を抱え、一銭も無駄に出来なかつたのです。『印刷屋は損失を被るべきです。』と一人の重役が言いました。『私たちは誠意を持ってやってきました。私たちが負担するものではありません』『しかしそれは四つのテストに反します』と別の重役が言いました。『当事者全員にとって公明正大か？』沈黙の瞬間が訪れました。そして最初に発言した重役の『会社がその500ドル全てを支払う』という提案が採択されました。



クラブ・アルミニウム社の事業は、躍進を続ける5年目の終わりに、負債を全額返済したうえ利益を出せるようになりました。15年後には株主達に大きな利益配当を払いました。社長の四つのテストは観念論ではなく、優れた実際のなものでした。

ハーブは『このテストの効能は、まずこの四つのテストを暗記し、しかる後に各自の思考、言語および行動をこれによって作るべきである。いまや四つのテストは友好な行為の尺度として全ての業界、政府、学校などで使用され立派な成果を上げている。それは正しい思考の尺度であり、これらを暗記していつも他人との関係に適用すれば、もつと友好でかつ深い友情を築くことができよう。もし諸君が各自の思考、言語、行動を四つのテストに照らして行動する習慣を作れば、他の人々からの経験からも明らかになようによい幸福を増し成功を収めるであろう。』と自信をもつて語りました。

ハーバート・テラーは1953年「テスト」の著作権をRIに委譲しました。テラーは1954年〜1955年RIの会長を務めました。

3月8日(木)例会の御案内

卓話

フロノボットによる

モチベーション

愛知工業大学 工学部 電気学科

古橋 秀夫助教授

ブリテン委員会

山口 正孝 神野 邦利・大原 敏正



四 つ の テ ス ト

- 1 真実かどうか
- 2 みんなに公平か
- 3 好意と友情を深めるか
- 4 みんなのためになるかどうか